保険毎日新聞「みちくさ保険物語」086

知られざる保険会社　(9) 太平生命保険株式会社〔その 1〕

牧野の随筆を集めた『牧野富太郎、花はなぜ匂うか』平凡社を読んだ。牧野は、小学校を「中退」し、植物採集と観察に熱中し、やがてはアカデミズムでも彼の植物分類学の成果が評価された植物学者である。現在の教育のように「垂直的序列化」と「水平的画一化」が強い中では生まれてこない学者である。

「植物と心中する男」という随筆の次の文章は強烈だ。「私は植物の愛人としてこの世に生まれてきたように感じます。あるいは草木の精かも知れんと自分で自分を疑います。ハヽヽヽ。私は飯よりも女よりも好きなものは植物ですが、しかしその好きになった動機というものは、じつのところそこに何もありません。つまり生まれながらに好きであったのです。」『前掲書』14 頁。これは彼が 74 歳だった 1936 年に書かれたものだ。好きということに理由がないほど好きなことはないのかもしれない。

牧野は植物学者としての功績を誇ることよりも、多くの人が植物に趣味を持つことを望んでいたようだ。彼は同じく 1936 年に書いた「夏の植物」と題する随筆の中で次のように述べている。「植物は意味の深き天然物である。この微塵の罪悪も含まぬ天然物を楽しむことから、どれほど吾人の心情を清くかつ貴くするかは量られぬ。醜悪なる娯楽よりこの清浄なる娯楽に転ずることは、人間として最もたいせつなことである。我輩はこのごとく天然物を娯楽の目的物として大いに高潔なる心情を養われんことを世人に勧めたいのである」。さらに続けて、植物を愛することの効用について次のように述べる。「植物は生物である。生長するものである。これを好くようになればそれが可愛くなる、可愛く思うのはすなわち慈愛心の発動である。一たび発動すればこれを助長することができる。すなわちついには大慈悲の心を養うことができると思う。人間同士に慈悲慈愛の心ができれば世の中は無事太平である。国平らかに天下治まるのである。大にしては戦争、小にしては喧嘩、それは人間同士の慈愛心すなわち思いやりがないから起こる。思いやりの心を養うに、植物をその道具の一つに使うは最も当を得たものであると信ずる。」『前掲書』95-96 頁。大陸では日中戦争が始まっている時代に、のんびりした主張である。また「風が吹くと桶屋が儲かる」のような論法であるが、牧野という天才植物学者の限界かもしれない。

さて本日紹介したい保険会社は、「太平」という名をもつ保険会社である。同社は戦前の生命保険史上、比較的長い存続期間を示しているにもかかわらず、ほとんどその名をしられていない。戦後生保との継承関係でいえば、日産生命の前身会社。明治 42 年 3 月に設立された太平生命は、昭和 15 年に経営権の変更があり日産生命となった。日産生命はさらに昭和 17 年 10 月に片倉生命を合併し、昭和 22 年に日新生命相互会社となった後、昭和 29 年に日産生命相互会社となった（日産生命の募集資料を掲載）。

同社は、農商務省の保険課長だった楠秀太郎が退官後、村井と左右田の両家の出資を得て設立したとされている。同社の初期の保険案内によれば、社長に元海軍少将の中村静嘉、専務取締役に楠が就任している。この他、村井貞之助と左右田棟一が取締役となっている。そ

の他、近江出身の前川善平、三越取締役の倉知誠夫などが取締役に名を連ねている。なお村井と倉知はともに共同火災の役員を務めており、左右田は太平火災の副社長を務めている。

銀行恐慌で左右田銀行が破綻する前の論評では、その後「社長に村井貞之助君がなっているかと思へば、左右田棟一君が副社長に納まって居り、その上に今は故人となったが、村井吉兵衛が監督、左右田喜一郎博士が相談役という名義の下に看板然として控えている」（稲見泰治『保険はどこへ』1926 年、84 頁）とされている。

金融恐慌により左右田銀行が破綻した後の同社の役員からは、左右田一族は姿を消している。昭和 5 年の同社社報から、同社取締会長に江口定條が就任していることがわかる（掲載画像を参照）。江口は 1887 年に東京高商を卒業し、三菱合資に就職し、その後実業界で活躍した経済人である。如水会の初代会長を務めた江口が、左右田博士との関係から同社を引き受けたことも考えられる。初代社長の中村静嘉、取締役の内野五郎三が取締役として残り、新たに横浜海上火災の社長井坂孝が取締役に就任している。また前取締役の前川善平と日清生命社長の望月軍四郎が監査役となっている。ちなみに前川善平は、後に日本共立生命（常盤生命）を買収して、前川生命を設立した、近江商人の前川一族である（前川生命本社の画像）。

太平生命の経営はといえば、けっして「太平」なものではなかった。設立者といわれる楠秀太郎は、保険課長から大阪生命の岡部廣の招聘に応じて在野に出た。彼の評伝によれば、「経済界の現状に鑑み、小会社の合同を行わんと欲し、大阪生命保険会社長岡部廣氏をして計画せしめたるに、岡部氏指命の範囲を逾へて独断専行した…之れを放任するを得ず，自ら野に」（小川功「生保破綻と'虚業家'による収奪」『滋賀大学経済学部年報』第 9 巻、2002 年、6 頁より再引用）下ったという。だとすれば、大阪生命事件に巻き込まれて、ミイラ取りがミイラになってしまったことになる。なお大阪生命をめぐる志田鉀太郎との関係については、印南博吉「志田先生と我国保険業界」（『明大商学論叢』35-3, 1951）に克明に描かれている。

太平生命は、大阪生命から離れた楠秀太郎があらたに明治 42 年に設立したということになる。大阪生命事件という大嵐に翻弄された楠としては、まさに「太平」を望んだのであろう。しかしながら、同時代の保険ジャーナリストによれば、「持前の豪傑肌と親分気質が墨を為して責任準備金をなんとかしたとかせぬとか、兎に角左様なことで、自分から会社を追ン出なければならぬ様に主務省から仕向けられた」（稲見『前掲書』84 頁）ということである。その結果、大正 15 年の時点では、契約高の割には利益が少ないが、その一因は楠を原因とした資産内容の劣化であろうと論評されている。

太平生命の総契約高 9 千 3 百万円余りであり、同じ時期に設立された会社と比較しても、日清には及ばないものの、その他の会社を凌駕している（掲載の表を参照）。同社の営業の健闘に関連して特色のある商品性について言及しなければならないが、紙幅の関係で次回以降に回したい。

太平生命保険本社社屋

戦時期に経営権が異動し日産生命保険となった。

太平生命保険株式會社
東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座 ㊐三六六〇・三三三二・三三三三
振替貯金口座東京一八九〇〇番

取締役會長 江口定條
取締役社長 石井徹
專務取締役 塚本明籌
取締役 井坂孝
同 鶴見左吉雄
同 中村靜嘉
同 内野五郎三
同 伯爵 二荒芳德
同 岡信吉
監査役 望月軍四郎
同 前川善平

支店、支部

大阪支店 大阪市北區梅田堂島
東京支部 東京市本郷區西片町
關東支部 横濱市長者町六丁目
福岡支部 福岡市大名町二丁目
臺北支部 臺北市大稻埕
京城支部 京城府黃金町二丁目
札幌支部 札幌市南一條西三丁目
廣島支部 廣島市紙屋町
仙臺支部 仙臺市本町
金澤支部 金澤市彌生町
名古屋支部 名古屋市西區
横濱支部 横濱市中區
京都支部 京都市下京區
新潟支部 新潟市本町通

前川生命日比谷本社

会社名	創業年月	総契約高	利益金
日清生命	明治 40 年 3 月	107,714,000	420,000
横濱生命	明治 40 年 3 月	54,283,000	150,000
住友生命	明治 40 年 6 月	26,348,000	270,000
國光生命	明治 40 年 10 月	92,023,000	416,000
福壽生命	明治 41 年 10 月	34,902,000	230,000
富士生命	明治 42 年 4 月	50,401,000	60,000
太平生命	明治 42 年 5 月	93,086,000	250,000

出典：稲見泰治『保険はどこへ』文雅堂、1926 年、85 頁